

京都東山の山津波

諏訪 浩

(東京大 空間情報科学研究センターおよび立命館大 歴史都市防災研究所 客員研究員)

2011年の台風12号は紀伊山地に大変な豪雨をもたらした。9月4日未明、和歌山県那智勝浦町では集落の裏山から津波が襲来し、住民多数が巻き込まれてしまった。山津波である。土石流は昭和40年頃まで山津波と呼ばれることが多かった。それは、海からやってくる津波、すなわち海津波の襲来のさまと似ているためだ。奈良県十津川筋では、この12号台風豪雨で大規模な山くずれ、すなわち深層崩壊がいくつも起きた。大量の土砂は足下の河川に突入して川津波を発生し、深刻な被害をもたらしている。

話の題目を“京都東山の山津波”とした。2500年前、すなわち弥生前期に起きた山津波が運び出した土砂が、この例会が催されている理学部セミナーハウス周辺の地下に埋まっていることに注目したためである。この地を含めて京都東山の裾野は、山津波が何度も繰り返すなどして造られてきた土地でできている。

海に囲まれた山がちな土地、日本列島に住み始めて以来、我々は地震や台風など、さまざまな天変地異とともに生きてきた。たとえば、鴨 長明が方丈記に記したごとくである。描かれている天変地異と災いの惨状は、つい昨日の出来事のようにも思える。それから800年。とくに近年の経済拡大に伴う人口増加と都市化、さらには少子高齢化が、天変地異をもたらす災いを変容させている。防災・減災につなぐべく、地震や台風などの天変地異と、それらが引き起こす災害と防災・減災についての科学研究が始められて100年余り。土石流については50年余りになる。そして、防災対策のための工事が進められ、警戒避難体制が整備されてきた。しかし、土石流による被害は後を絶たない。土石流による被災で人的被害が減らない最大原因は、我々人間だれもが備える或る種の認知バイアスにある。災難が迫りつつあるのに、このバイアス、正常性バイアスが働いて逃げ遅れる。どうすればよいか。山くずれや土石流の特徴とメカニズム、減災対策の一端を紹介しながら考えたい。

参考文献:

鴨 長明『新訂 方丈記』岩波文庫 (岩波書店, 1989)

宇智吉野郡役所『明治22年吉野郡水災誌』全11巻 (1891, 復刻版 (奈良県十津川村, 1980))

明治大水害誌編集委員会『紀州田辺 明治大水害』(和歌山県田辺市, 1989)

富井 眞『京都白川の弥生前期末の土石流』(京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度, 225-262, 2005)

鎌田文雄・小林芳正『十津川水害と北海道移住』シリーズ日本の歴史災害第2巻 (古今書院, 2006)

藤田 崇・諏訪 浩『昭和28年有田川水害』シリーズ日本の歴史災害第6巻 (古今書院, 2006)

諏訪 浩: “京都東山の土砂災害”『京都の歴史災害』(吉越昭久ほか編著, 思文閣出版, 2012)の第5章

太田猛彦『森林飽和』国土の変貌を考える, NHKブックス (NHK出版, 2012) など

